

## グレード（経済主義者）のポイント

次に『グレード』〔信条〕の全文をかかげる。

「……………狭量なマルクス主義、否定的マルクス主義、原始マルクス主義（社会の階級への区分についてあまりにも図式的な考え方をするところの）は、民主的マルクス主義に席をゆずるであろうし、現代社会の内部における党の社会的地位は、するどくかわるにちがいない。党は社会を承認するであろう。党の狭隘なギルド的諸任務、大部分のばあい宗派的な諸任務は、社会的諸任務にまで拡張され、権力の奪取を旨とする党の努力は、勤労諸階級の（あらゆる）権利をもっとも有効に、そしてもっとも完全に擁護するために、現状に適応した民主主義的方向に沿って現代社会を変更し改革することを目標とする努力に、かわるであろう。『政治』という概念の内容は拡張されて、真に社会的な意義をもつようになり、現瞬間の実践的諸要求にはいままでより大きい比重があたえられるであろうし、いっそう大きな注意がはらわれることと期待してよい。……………」

ロシアのマルクス主義者にとって、活路はただ一つである。プロレタリアートの経済闘争に参加すること、すなわちこれを援助すること、そして自由主義的な反政府活動に参加すること、これである。ロシアのマルクス主義者は、『否定者』としてはきわめてはやく登場したが、しかしこの否定は、政治的急進主義の方面にそそがれるはずであった彼らのエネルギーの部分をよわめる結果になった。これらすべてのことは、いまのところおそれるほどのことではないが、しかし、もし階級的図式がロシアのインテリゲンツィアに生活への活潑な参加をさまたげて、彼らをいろいろの反政府サークルからあまりにも遠ざけるなら、そのことは、労働者階級がまだ政治的任務をかかげていないためにやむをえずこの労働者階級と提携することなしに法制的諧形態のための闘争を行っているすべての人にとって、重大な損失となるであろう。政治的主題についての観念的論議のかげにかくされているロシアのインテリゲンツィア出身のマルクス主義者の政治的無邪気さは、彼らに痛棒をくらわせることになりかねない。」

これらの見解をともししているロシアの社会民主主義者が多数いるかどうか、われわれは知らない。だが、総じてこの種の思想に賛成者があることは、疑いない。そこでわれわれは、このような見解にたいして断固として抗議し、ロシアの社会民主主義派を、そのすでに予定した道——すなわち、プロレタリアートの階級闘争と切りはなしえないように結びつき、しかも政治的自由の獲得を当面の任務とする独自の労働者党をつくるという道——からそらせる危険にたいして、すべての同志諸君に警告を発することを、自分の義務とみなすものである。……………」

マルクス主義は、労働者階級の経済闘争と政治闘争を結合して単一不可分離の全一体化したのであって、この二つの闘争形態を切りはなそうとする『グレード』の筆者たちの志向は、マルクス主義にたいする彼らのもっとも不首尾な、哀れな背反の一つである。……………」

悪名たかいベルンシュタイン主義——一般に広範な公衆が、そしてとくに『グレード』の筆者たちが通常理解しているような意味での——は、マルクス主義理論をせばめようとする企て、革命的労働者党を改良党に転化しようとする企てであって、この企ては、当然予期すべきことではあったが……………」

プロレタリアートの経済闘争が巨大な意義をもっており、そのような闘争が必要であることは、マルクス主義が当初からみとめていたところであって、すでに四〇年代にマルクスとエンゲルスは、このような闘争の意義を否定した空想的社会主義者たちに反対して論戦を行ったのである。

それから約二〇年たって国際労働者協会が創立されたとき、労働組合と経済闘争との意義にかんする問題は、一八六六年のジュネーヴにおける第一回大会で提起された。この大会の決議は経済闘争の意義を正確に指示し、一方ではその意義の過大視（これは当時イギリスの労働者のあいだにみとめられた）にたいして、他方ではその意義の不十分な評価（これはフランス人とドイツ人、とくにラッサール主義者のあいだにみとめられた）にたいして、社会主義者と労働者に警告した。決議は、労働組合を、資本主義の存在下においては合則的なばかりか、必要な現象であるとみとめ、——資本にたいする日常闘争に労働者階級を組織するため、また賃労働を廃絶するために、きわめて重要なものとみとめた。決議は、労働組合がその注意をもつばら「資本にたいする直接の闘争」にかぎってはならないこと、労働者階級の一般的な政治的・社会的運動のそとに立ってはならないことを、みとめた。労働組合の目標は「狭隘な」ものであってはならず、幾百万の被抑圧労働人民の全般的解放を目ざしてつとめなければならないことを、みとめた〔マルクス＝エンゲルス選集、第11巻、161～163 ページ〕。そのとき以来いろいろの国の労働者諸党のあいだでは、当該の瞬間には、あるいはプロレタリアートの経済闘争に、あるいはその政治闘争に、いますこし多くまたは少なく、注意をはらうべきでないか、という問題は、いくたびか提起されたし、そしてこんごももちろんいくたびか提起されるであろう。しかし、一般的すなわち原則的な問題は、こんにちでもマルクス主義の提起したのと同じ形で立てられている。単一の階級闘争はかならず政治闘争と経済闘争とを結合しなければならない、という確信は、国際的な社会民主党の血となり肉となっている……

ほかの反政府諸党にたいする労働者党の態度になにかの重大な変更をくわえるということも、なおさら問題にならない。この点でもマルクス主義は政治の意義の過大視や陰謀主義（ブランキ主義その他）からも、政治を軽視したり、政治を日和見主義的・改良主義的な社会的弥縫策に狭小化したりすること（無政府主義、空想的・小ブルジョア的社会主義、国家社会主義、教授的社会主義、その他）からも、一様に遠い、正しい立場を指示した。プロレタリアートは、独自の労働者政党的の創設を目ざしてつとめなければならないが、その党の主要な目標は、社会主義社会を組織するために、プロレタリアートに政治権力を奪取させることでなければならない。プロレタリアートは、他の諸階級や諸党をけって「一団の反動的大衆」とみなしてはならない。反対に、プロレタリアートは、政治的・社会的生活全体に参加し、反動的な階級や党に反対して進歩的な階級や党を支持し、現存体制にたいするいっさいの革命運動を支持し、いっさいの被抑圧民族または人種、いっさいの迫害されている宗教、無権利な性、等々の擁護者とならなければならない。この題目についての『グレード』の筆者たちの議論は、プロレタリアートの闘争の階級性をばかし、なにか無意味な「社会の承認」といったようなものでこの闘争を無力化し、革命的マルクス主義を狭小化して月なみの改良主義的潮流にかえようとする志向を立証するものにすぎない。

第四巻 ロシア社会民主主義者の抗議 P183~189 1899年8~9月執筆

## コメント

単一の階級闘争はかならず政治闘争と経済闘争とを結合しなければならない、という確信は、国際的な社会民主党の血となり肉となっている。マルクス主義は政治の意義の過大視や陰謀主義、政治の軽視、政治を日和見主義的・改良主義的な社会的弥縫策に狭小化してはならない。

私たちはプロレタリアートの闘争の階級性をぼかし、なにか無意味な「社会の承認」といったような、支配階級によってつくられた常識に迎合する形でこの闘争を無力化し、革命的マルクス主義を狭小化して月なみの改良主義的潮流にかえようとする志向と闘い、「(プロレタリアートの) 党の主要な目標は、社会主義社会を組織するために、プロレタリアートに政治権力を奪取させることではなければならない」、そのために「**学び、宣伝し、組織する**」ということを片時も忘れてはならない。